

## 慣行農業技術と経営的条件

## 肥 後 直\*

Higo, S. Relationship between Agricultural Customary Techniques and Farm Economy

1. 問題 鹿児島県の水田裏作麦の栽培においては横雁木栽培と称する作式が相当広く行われている。この作式の最も顕著な地方は経営規模が零細で、專業率が低く、役畜の少ないところが多いが、必ずしもそうではなくて慣習によるところも大であると思われるので、経営条件の極く中庸な始良郡に調査地を求め、その点を吟味してみようとした。

調査地始良郡加治木町木田西原部落では、現在町当局の指導のもとに作式改善の展示圃を設けており、総農家戸数27戸のうち14戸がこれに協力し、残りの13戸は在来の横雁木式を行つている。この地方でも、かつては平畦による作式、広播き、その他移殖麦等が指導され、実施されたことがあるが、いずれの場合も、1、2年しか続いていないので、この指導奨励がどのような結果になるか注目されている。

2. 作式により分けた両農家群の間にどのような相違があるか、経営主体を分類してみると、普通作式のものには老人（表現はまずいが）が多く、横雁木式のものには未亡人が多い。そして青壮年の中にも横雁木式のものがかかなりある。専業別にみると、専業農家に普通作式のものが多いし、兼業農家は大体において横雁木式である。3～7反の経営規模を中とし、3反未満を小、7反以上を大経営とし、経営規模別にみると、大経営では普通作式、小経営では横雁木式が多く、中経営では普通、横雁木式がそれぞれ相半ばする。

この付近は稲作地帯で、副業として少々碾加工を行う外、煙草耕作者が若干あるだけで、蔬菜園芸の如きは全く行われていない。したがつて、経営の組織と作式の間には特別な関係はみられない。無畜農家の中には他の農家に犁いてもらい、手間替えをする農家があるので、無畜農家必ずしも横雁木式とはいえないが、畜力利用の面をしさいにみると、畜力利用をしない普通作式ものは稀であるし、横雁木式のもの過半は畜力利用をしていない。尤も畜力利用といつても、本田の耕起整地だけで、中耕、土入れ、土寄せは鍬だけに頼り、ジョレン式の土入機すら（所有していても）使用していない。現在西岡式の畜力土入機が1台共同で導入されているが、実績は調査当時まではわからなかつた。したがつて、両作式のどちらが有利であるか、その得失はどうであるかという点に結論を下すことはできないけれども、問題の所在を示すと次のようにいえるであろう。

3. 麦に対する堆肥の施肥量は300貫程度のものが若干みられるが、100～150貫施用するのが普通である。このように施用量のもとでは堆肥と一緒に播種する横雁木式の方が収量的には優越することになるのではないか。横雁木式が改まるには当面の問題としては畜力土入機の如き畜力農機具の導入が大切であるけれども、あくまでも指導奨励と共に堆肥の増産、家畜の導入が相伴わなければならないであろう。

\*鹿児島県農業試験場